

第34回日本皮膚科學會岡山地方會演說抄録

(昭和11年12月24日、於岡山醫科大學皮膚科泌尿器科教室)

1. 種々なる皮膚疾患の血小板數に
就て (豫報)

江原 敏 夫 君

追て原著として發表の豫定なり。

2. 圓形脱毛症の2,3の異例に就て

和 田 雅 之 君

1) S. Y. 23歳女, 約半年前もみ摺り器械に頭髪を巻き込まれ前頭部に銅貨大の脱毛部を生じ其の後頭部全體に脱毛有り2,3箇月後, 頭部は全く脱毛したるも其の後次第に再生し來院當時は全頭部に柔かき毛髮散在せり。頭部以外に脱毛なく全身も亦正常なり。

2) B. H. 45歳男, 20日前より左耳後部, 後頭部に圓形の脱毛を認む。患者の弟同村落に居住し理髮業を営み10年來本症に悩める有り, 外に同村に本症の重症なるもの2, 輕症7—8人有り本症の傳染性を主張してゆづらず。尙ほ本患者も全身に異常なし。

3) M. M. 12歳女, 2年前左耳下淋巴腺炎の手術後左側前頭部に脱毛有り容易に治癒するも屢々再發す。約5箇月前可成り毛髮の再生せる頃理髮屋にて毛髮再生促進の目的にて頭髪を「コテ」にて焼きたるに少時の後全頭部に著しき脱毛有り遂に1の頭髪なきに至れり。1—2箇月後再生し初め現在は(1)の患者と同様の状態に有り。全身に異常なし。

3. 丘疹狀壞疽性結核疹

向 畑 十 四 郎 君

4. 油疹に就て 武 居 繁 彦 君

追 加 小 池 藤 太 郎 君

5. 恐らく「レントゲン潰瘍」より感
染せりと思はるる微毒疹の1例

三 井 義 亮 君

追 加 關 藤 忠 雄 君

6. 皮膚組織の電解質に就て

西 川 規 夫 君

原著として發表の豫定。

7. 「ペラグロイド」の1例

橋 英 基 君

初診, 昭和11年7月17日 16歳男子で, 兩足背部, 兩下腿部及び兩手指背部に著明な紅褐色の紅斑と板狀落屑を有する皮膚症狀, 頑固な下痢を伴ふ消化器症狀及び頭痛, 手指震顫を有する輕度の神経系症狀を具備する典型的な蜀黍紅斑に就て報告す。

8. 皮膚癌の1例

伊 藤 誠 爾 君

患者 森某女 64歳 農業

初診 昭和11年11月7日

主訴 左側眼瞼に於ける潰瘍形成, 家族歴及び既往症は特記すべきことなし。現病歴 7年前左の内眥に半米粒大の硬き腫瘍を生じ次第に増大す次で半年前より該部に可成りの疼痛を覺え睡眠すらさまたげらるるに至る。

現症及び局所所見 體格榮養共に中等, 全身皮膚蒼白, 乾燥せり, 右眼は視野多少狭きも其の他異常なし。左側眼部を見るに下眼瞼は全く潰瘍に陥り之を缺く, 潰瘍の範圍は左側眼部全體より鼻梁の左側に至る。潰瘍縁は全く不規則堤防狀に

隆起し質硬く所々汚穢灰白黄色の痂皮を以て被はれ潰瘍底は灰白色にして特有なる臭氣ある分泌物を附着す、潰瘍部の鼻側に近き部には鼻腔に通ずる穴あり眼球も破壊して其の姿を見ず。

治療及び経過 先づ Radium を 996 mg. St. 用ひ次で 25 日の期間を以て更に 645 mg. St. 使用するに自覺的症狀特に疼痛を減じ外眥の腫瘍は著しく縮少せり。

9. 癩患者の眼瞼黄色腫に就て

保 田 耕 君

癩患者殊に結節癩患者の眼瞼に屢々一般非癩人に發生することある扁平黄色腫に極めて類似の黄色斑の發生せるを見る。

長島愛生園眼疾受診患者 805 名中 27 例 (3.4%) に於てかかる黄色斑を見たり。内男 17 (2.8%)、女 10 (5.2%) なり。患者は總て結節癩にして、黄斑は常に左右兩瞼に對生す。眼瞼以外同時に頭部、大腿、肩、頬部等に發生せるものもあり。

組織學的所見は第 1 例の「ヘマトキシリン・エオジン」標本に於ては真皮乳頭層の下部より網状層の殆ど全層に亘り殊に其の上層部到達に一見所謂黄色腫細胞に基だ類似の細胞の集團あり。皮下組織には殆ど認められず。而して毛細管の周圍には必ず之を見る。この細胞浸潤のため結締組織纖維は壓排せられて甚しく減少し、所によりては極僅少の結締組織纖維介在するのみ。該細胞は大小種々、多數蜂巣状に集群をなし、1 群の周圍は結締組織によりて圍まる。細胞膜甚だ菲薄にして、所によりては隣接細胞各々融合せる如く見ゆるものあり。其の原形質内は全く泡沫状、細顆粒状にして 1 乃至數箇の核を有す。「ズダン III」及び「ニルブラウ」により細胞内には「リポイド」の充満せることを認む。此「リポイド」は又結締組織細胞内にも含有さるものあり。泡沫状細胞の膜破れて「リポイ

ド」の漏出せるものあり。此「リポイド」には重屈光性無し。癩菌は真皮に於て毛細管壁、皮脂腺、結締組織細胞等に僅少認めらるる他、泡沫状細胞の内部にも少數の癩菌を含有するもの甚だ少數に存在す。されど大部分の細胞は癩菌を含有せず。此細胞は即ち癩細胞に他ならず。一見所謂黄色腫細胞と甚だ相似て、此もののみを見ては其の區別頗る困難なれど、以上の組織學的所見により明かに癩細胞なるを認む。

第 2 例の組織學的所見も亦殆ど第 1 例と同様なれど癩菌は更に極めて尠し。

以上により此黄色斑は癩性浸潤によりて惹起せられたるものと考へられ、癩性眼瞼黄色腫とも云ふべきものなり。

10. 癩性爪床炎 (第 3 報)

立 川 昇 君

爪の顯微鏡的所見

(I) 重症結節癩

(1) 爪の Lamelle は一般に不正爪壁を出た處で分割して居る例もあり、角質層と顆粒層との間に 1mm に及ぶ間隙をみるものあり、Parakertose を認む。爪は爪母の部分に於て前後の癩性浸潤のため方向が垂直に近い迄に屈曲して侵入せる例もあり、Körnerzellen の殘存せるものあり。

(2) 爪床、爪壁、指腹部の上皮、乳頭は直下の癩性浸潤のために萎縮し、真皮層には頗る多數の癩菌及び癩性浸潤あり、泡沫細胞多數あり、時に巨大細胞あり、皮下脂肪纖維萎縮。血管は動靜脈壁共に癩性變化あり、指骨に附着する腱、神經間質 Pacini 小體にも癩性變化を認む。

(3) 骨膜細胞、骨組織、骨髓中にも著明なる癩性の變化あり。

(II) 重症神經癩

(イ) 爪の萎縮、Lamelle は不正。種々なる角化

の道程を認む。

(ロ) 爪床上皮、爪壁及び指腹部の上皮に萎縮あり、乳頭層菲薄にして不正なり。真皮に於ては特別の變化なし、汗腺は萎縮し、血管壁は軽度肥厚す。

指骨著明なる萎縮あるが癩菌及び泡沫細胞なし、Pacini 小體は萎縮す。

11. 癩屍 2, 3 臓器の大きさ及び重量に

就て

神 宮 良 一 君

本園解剖例 260 體につきて腦、心臓の重量と、肝臓、脾臓及び腎臓の大きさ及び重量を測定せるに次の如き結果を得たり。

1. 腦、非癩に比して少しく軽く、結節癩は神經斑紋癩に比して重し。
2. 心臓、神經及び斑紋癩は結節癩よりも重く而して非癩に比し何れも輕し、而して神經及び斑紋癩の重量は非癩の重量に近し。
3. 肝臓、結節癩、神經及び斑紋癩共に其の大きさ殆ど等し、されど其の重量は結節癩稍々重し、而して非癩に比し殆ど大差なし。
4. 脾臓、結節癩は神經癩に比し大且重く、非癩に比し著しく重し。
5. 腎臓、神經癩、結節癩共に其の大きさ重量に大差なく左腎は右腎に比し少しく大且重し非癩に比し著しく大且重し。

12. 余等の創製せる 1 新劑の癩性神經痛に對する効果

早 田 皓 君

尾 垣 正 雄 君

13. 高度なる癩性氣管枝狭窄の 1 例

宗 内 敏 男 君

14. 癩性延髓球麻痺を伴へる結節癩の急性浸潤の 1 例

田 尻 敢 君

余は第 5 回癩學會に於て斑紋、神經癩 2 例に現れた癩性延髓球麻痺に就てのべたが、最近結節癩患者の急性浸潤に延髓球麻痺の症狀を伴へる 1 例を経験した。急性浸潤即ち顔面、胸、背部及び四肢に急性に癩性浸潤が現れた後に顔面神經痛、顔面神經麻痺(額部の麻痺も強く見られた)嚥下障碍、味覺障碍、發音障碍(構音不良性障碍)及び聲音嘶啞、副神經麻痺等の延髓球麻痺の諸症狀が現れて來た。此症狀の發現は進行性球麻痺と異なり其の順序が不定である。而して急性浸潤が一過性であると同様に或る期間を経て大部分は恢復に向ふが幾分は永く障碍を遺すを常とするのである。

これ等の症狀及び經過は進行性球麻痺或は急性球麻痺等の延髓疾患とは區別が容易である。光田氏の研究による延髓に於ける神經核の癩性變化の病理的所見をも參考して癩性延髓球麻痺を主張するのである。

15. 蒼鉛の臓器親和性に就て

小 池 藤 太 郎 君

動物體内に輸入せられたる種々なる蒼鉛劑の吸收、分布、排泄狀態等を檢せんが爲顯微化學的方法を以て諸臓器組織を檢せり。詳細は原著に譲る。

16. 癩菌移植實驗に際して「マウス」の腹腔内に認める結節に就て

野 島 泰 治 君

17. 村田氏反應の偽輪に就て

根 岸 博 君

村田氏微毒沈降反應に於ける種々なる偽輪に就て詳述し併せて其の原因に關する研究の 1 部を發表せり。詳細は原著として發表の豫定なり。